

令和2年度

二条城歴史研修会[記録]



平成29-30年度に実施した「二条城歴史調査」の成果等を踏まえ、令和2年度、二条城にまつわる歴史の解説研修会を開催しました。本冊子はその記録です。

二条城歴史研修会 開催概要

令和3年(2021)3月2日(火) 13:30~15:00

小田龍哉 同志社大学・神戸市外国語大学非常勤講師
「離宮時代の二条城」

令和3年(2021)3月11日(木) 13:30~15:00

原戸喜代里 京都市文化財保護技師
「大正大礼の饗宴場について」

場所：レクチャールーム（大休憩所北側）

二条城歴史研修会〔記録〕 目次

離宮時代の二条城 小田龍哉

はじめに.....1

1. 移管後の大修理.....2

宮内庁への移管／大修理についての検討／床工事／明治宮殿との影響関係／
明治天皇の行幸／外国人旅行者の語る印象／本丸御殿の移築／二条離宮の構造

2. 二条離宮の位置づけ.....6

他施設との関連／二の丸御殿の床の変遷／離宮の境界 一周辺の土地利用

3. 移管の検討 京都市への下賜へ.....8

おわりに.....9

大正大礼の饗宴場について 原戸喜代里

1. 大礼とは.....10

令和の大礼

2. 近世までの大礼.....10

即位礼の変遷／大嘗祭の変遷

3. 近代の大礼.....11

明治の大礼／旧皇室典範・登極令の制定／大正の大礼

4. 大正大礼の饗宴場.....13

饗宴場計画の方針／関連施設の造営と修繕／饗宴場の新造営／儀式の様子

5. 饗宴場の下賜.....18

下賜先の傾向／饗宴場の下賜の事例

6. さいごに.....20

離宮時代の二条城

同志社大学・神戸市外国語大学 非常勤講師
小田 龍哉

はじめに

2017・2018年の2か年にわたって実施された二条城歴史調査で、私は近代の離宮時代を担当しました。

現在、二条城の正式な名称は「元離宮二条城」ですが、一般的に「離宮」はほとんど意識されず、たんに「二条城」と呼ばれます。離宮時代も、新聞をはじめ皆が「二条城」と呼んでいました。当時も今も認識はあまり変わらないともいえるわけです。

では「離宮」とはいったいどのような場所なのでしょう。辞書的にいえば、天皇や皇族の別邸ということになります。私の専門は近現代の思想史・文化史ですが、人は、たとえば「二条城」「京都御所」「京都」という都市……といった具合に、一言で言葉になる場所やモノに惹きつけられて、そこを訪れたり商品を買ったりします。いわゆる「ブランド」ですね。ところが、言葉の奥にはさまざまな固有の構造があって、時代を追うにつれてダイナミックに変化しています。その分析が私の問題関心です。二条城歴史調査でも、そうした観点で調査をしました。

もっとも、調査報告書にはあまり悠長なことは求められないので、なるべく端的に結論をまとめましたが、今日は私自身の興味を含めて、そうした二条城の重層的な構造について考えてみたいと思います。

主たる史料としては、まず、宮内庁宮内公文書館所蔵の『二条離宮沿革史（上・下）』があります。電話帳2冊分くらいの厚さの、とても充実したもので、今後も沿革としては

これが基本史料になるでしょう。そのほか、離宮時代に行われた工事について逐一記録した毎年の簿冊『工事録』があります。大変なボリュームで、2017・2018年の調査では調べることができていません（今後の歴史的検討は、おそらくこれを丹念に調べていくことがメインになるでしょう）。さらに、絵図・図面類も調査対象でした。

それらと並行して、当時の新聞記事も分析しました。1876年から1913年にかけての『京都日出新聞』関連記事をしらみつぶしに追い、約900件をリストアップしました。そのほか、海外からのまなざしにも注目し、外国人の旅行記に当たりました。アーサー・H・クロウ（1881年6月9日訪問）⁽¹⁾、エリザ・シドモア（1884年から1891年の間に訪問）⁽²⁾、ニコライ二世（1891年5月10日訪問）⁽³⁾、フランツ・フェルディナント（1893年8月9日訪問）⁽⁴⁾らが二条離宮を訪れ、記録を残しています。

(1)『日本内陸紀行』岡田章雄・武田万里子訳、雄松堂 1984年 (Highways and byeways in Japan: The experiences of two pedestrian tourists, London: Sampson Low, Marston, Searle, and Rivington, 1883.)

(2)『シドモア日本旅行 明治の人力車ツアー』外崎克久訳、講談社学術文庫 2002年 (Jinrikisha Days in Japan, New York: Harper & Brothers, 1891.)

(3)保田孝一『最後のロシア皇帝ニコライ二世の日記』講談社学術文庫 2009年

(4)フランツ・フェルディナント『オーストリア皇太子の日本日記 明治二十六年夏の記録』安藤勉訳、講談社学術文庫 2005年



大修理についての検討

1885年（明治18年）6月5日の府庁移転直後から1886年にかけて、城内の大規模な修理工事や解体撤去工事が実施されます。

『二条離宮沿革史』からは、工事の計画段階で、東南・西南隅櫓の解体や、煉瓦造りの台所・料理の間の新築、外濠土塀の煉瓦塀改築なども検討されていたことがわかります。

1. 移管後の大修理

宮内庁への移管

1884年（明治17年）7月28日、二条城は「二条離宮」と名称をあらため、以降、宮内省の管轄下に置かれることになりました。「京都二条城ハ慶長年中ノ建築ニ係リ其構造ノ壮麗ニシテ海外各人モ之ヲ称揚候場所ニ付」（宮内省稟告 1883年9月4日（『公文類聚』収録））とあるように、慶長年間の建築であること、構造が壮麗であり、外国人にも賞讃される場所であることがその理由でした。

移管後は大きく手を入れなくてはなりません。それまでは京都府庁、つまりオフィスとして使用されていました。離宮は海外からの貴賓・貴頭を招く場所でもありますので、オフィス仕様から変更する必要があります。修理・改装については多岐にわたる内容が検討されました。

府庁時代、二条城の周囲は江戸期からのま白い土塀に囲まれていました。これを土塁に変えてはどうか、隅櫓も解体してよいのではないか、ひいては煉瓦塀にしたらどうか、それについてはどれだけ費用がかかるのか……、などさまざまなアイデアが検討されたのです。煉瓦造りの台所をつくったらどうか、という案もありました。

いわゆる鹿鳴館のような洋風の施設として大改造するということが検討されていたわけです。同時期の東京では、明治宮殿の建設（1888年10月竣工）にあたって、洋風にするか和風にするかという論争があり、方針が二転三転しています。そうした状況と併行して、二条城の修理も行われたのです。

ただし煉瓦塀などのアイデアは、ご存じの通り実行はされませんでした。イラストレーターさんに煉瓦塀の二条城想像図を描いてもらいました〔図1〕。もしこのようになって

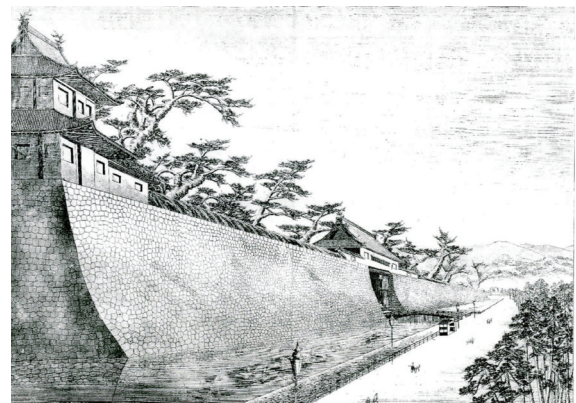
〔図1〕煉瓦塀の二条城（想像図）



（イラスト：山口綾子）

©nenpi_

〔図2〕宇治市歴史資料館蔵の銅版画



（「市中二条離宮 NIJO RIKIU 第四十九号」『幕末明治・京都遊覧』宇治市歴史資料館提供）

いたら、ずいぶん印象も違っていたでしょう。

また、東大手門と隅櫓の間の塀も、もともと土塁にする予定でした。しかし、距離も短いので白い土塀のまま残しておこうということで、現在のような姿になっています。

〔図2〕は宇治市歴史資料館が所蔵する当時の銅版画です。東大手門と西南隅櫓の間が土塁として描かれています。隅櫓の向きも90度違ってしています。正確に写生されたものでなく、誤って描かれたのでしょう。

床工事

一番の大工事は、実は見た目の変更よりも基礎の部分でした。床下の柱補修工事に最も予算もかけていることがわかります。難工事だったため、追加予算もつきました。

「床下意外之腐朽ニ属シ最前見積之通柱根総体切編候ノミニテハ後保方無覚束存候ニ付…」(二条離宮修繕工事録一 伺及往復書 自明治十八年至同二十年)と、予想以上に柱の根元部分の腐朽が進んでいたことが報告されています。

また修復後も、明治後期に大規模な床上げ工事が行われています。

明治宮殿との影響関係

二の丸御殿の障壁画は、いわゆる「大和」や「平安」ふうのモチーフで描かれており、これは明治宮殿の影響だといわれてきました。ただし、一方的に影響を受けるのではなく、両者は相互に影響し合っていたようです。

たとえば、修理工事完了間近のころ、明治宮殿の造営に関わっていた大倉喜八郎（大倉財閥創始者）が、美術上（おそらく内装でしょう）の参考のため、二条離宮の視察に訪れています。

「此程京都に來り祇園中村樓に投宿せし東京の大倉喜八郎氏は皇居御造營事務に付て其一部分を負担する處あるよしにて美術上参考の爲め御所及び二条離宮拝觀の義を願ひ出しに特別を以て一昨々日拝觀を許され一昨日東京に歸りたるよし」（京都日出新聞、1886年

12月9日）

短い記事からすべてを読み取るわけにはいきませんが、どうやら明治宮殿に与えた影響は少なくなさそうです。このようにして、離宮というありかたが整えられていったのです。

明治天皇の行幸

「離宮」としての二条城の最初の大仕事は、1887年（明治20年）1月の明治天皇の行幸でした。明治天皇は、離宮や御用邸にはあまり足を運ばなかった天皇といわれています。「移動する天皇」だったという指摘もありますが、別邸に長期間滞在することはまれでした。

「大手門より入御、車寄せより御昇殿。夫より黒書院白書院を経させ玉ひて西の御座間にて御休憩。此玉座に於て午餐をきこしめされ、夫より本丸九天守台辺を御巡覽。再び玉座に就き玉ひ暫く御休憩有て還御の節、間毎を御覽あらせられ白書院には大徳寺什宝の牧溪の筆猿猴及び龍虎の図を始め六七幅を御展覧の上、還御」（京都日出新聞、1887年1月30日）

当日は大手門から車寄せに入り、二の丸御殿の黒書院、白書院を通り西の御座間にて休憩をとっていますが、御座間がどこだったのか、図面では確認できません。白書院の間の間・二の間に当たる場所かと想像しています。そこで食事をとり旧天守台を見て再び二の丸の玉座に戻ってきた。しばらく休憩して今度は美術品を見て帰ったと報道されています。

外国人旅行者の語る印象

その後、皇族や有力者たちが訪れるようになっていくのですが、海外からの旅行者もふえていきます。写真家・ジャーナリストのエリザ・R・シドモアもその一人です。ワシントンD.C.のポトマック河畔に桜並木を作することを提案した親日家です。二条離宮を訪れた彼女は、非常に感銘を受けています。

「京都の城、二条城は御所の南一マイル半

のところにあります。将軍が富と権力を誇示した場所で、壮麗な封建時代の遺物です。広い濠、跳橋（と見たのでしょうか）、堅牢な石垣、さらに塔のような楼門と隅櫓は一六世紀中頃（少し認識がずれていますね）に作られたと推定されます。最初の石垣内の壮大な楼門は、隅柱の燭台から棟柱まで手の込んだ金属装飾の塊ですが、たくさんあった徳川家の三葉葵は、どこも天皇家の菊の紋に取って代わりました。すべての部屋、特に壮麗な二つの謁見の間は、各床の間の前に広い高座を持つ装飾美術の結集です。彩り豊かな金箔屏風、精緻な絵画、鮮やかな金属細工、彫刻された素晴らしい欄間、さらにくぼんだ天井羽目板には花環、紋章、幾何学模様がデザインされています。」（注（2）参照、（ ）内は講演者補足）

このように、装飾への美しさに感嘆しながらも、洋風への改変を嘆いています。

「しかし、なんという嘆かわしさ！ これらの儀礼会場には、忌まわしきブラッセル絨毯（これは『工事録』にも見えます）、丸い中央テーブル、背のまっすぐな椅子など（明治宮殿も同様）、応接セットが車座となって詰め込まれ、下品そのものです。まるで、それは官舎、事務所、大商店、さらに京都の茶屋のごとき安っぽい光景でした。」（前掲書）

皇室建築の内装については、明治宮殿や他の御用邸でも、洋風あるいは和風とさまざまな変遷があったようです。大正天皇は和風を好んだと言われていたり、それぞれの天皇の特色もあります。二条離宮の内装の変遷を細かく分析するとさらに面白いはずです。

さて、外国人旅行者たちは二条離宮を、基本的には御所に対置される「将軍の城」と捉えていたようです。

ロシア皇太子ニコライ二世は1891年5月10日に二条城を訪れました。大津事件で刺傷される前日です。「将軍の御殿では天上の色彩と古い青銅の装飾品に魅惑させられた」（傍点は講演者）と語っています。おそらく現地で「将軍の御殿」とガイドされたのでしょう。近代の日本人の自己認識の問題にも関連

するのですが、西洋との出会いをつうじてむしろ「武士の国」「サムライ」といった自己へのまなざしが生まれ、それが「城」としての二条城の表象にもつながっていたのだと思われれます。

オーストリア皇太子フランツ・フェルディナントは1893年に訪れています。

「二条城は、一六〇一年、家康によって上洛時の居館として造営され、以来、徳川将軍の宿所となり、一八六八年には皇室の所有となった。ぜんたいの外観はいかにも城砦であり、巨大な城壁は櫓をそなえている。そのため、たとえ入り口の唐門が御所とは桁違いの芸術感覚と豪華趣味を見せてはいても、訪れる者はその先の華麗な内部は夢想だにできないだろう。二の丸御殿の黄金色が満ちあふれる部屋部屋を通ってゆくと、面妖な魅力にとらわれてしまった。灰光る背景から華麗な金碧障壁画が浮かび、未知の芸術様式に眼差しを向けさせるのだ。これまでみてきた日本の絵画では、とくに繊細さ、細部への意思に驚嘆させられてきたが、ここでは壮大華麗な躍動を認めざるをえなかった。」

「殿内のどの部屋も、かつての将軍対面所である大広間に比べれば絢爛さにおいては色あせてしまう。大広間では、黄金色の装飾が文字通り見学者を眩惑させるのである。だが、この大広間の絢爛さにつつまれてはいても、どこか恐ろしさを拭いきれないことがあった。大広間には隠し戸があり、その向こうの小部屋に忍んだ将軍警固の武者がいつでも飛び出せるように待機しているのでは、とつい思ってしまうからだ。」（注（3）参照）

「城」としての二条城に、言葉にできないような、独特な畏怖の念を感じとっています。

前年の1892年（明治25年）1月～8月の8か月間で、訪問者数は342名を数えています。『京都日出新聞』の記事ですが、一般公開（1940年より）される以前の時代にもかかわらず、結構な人数が訪れていることがわかります。

本丸御殿の移築

1993年（明治26年）になると、今出川御門内にあった旧桂宮邸が移築され、本丸御殿になります。改修工事は1894年にかけて行われました。

翌年の1895年には、明治天皇が訪れ、御殿内の部屋の名称を変更し、本丸庭園の改造を指示しています。近代国民国家としての日本が日清戦争という初めての大きな対外戦争を経験した直後のタイミングで、広島大本営からの帰途に立ち寄ったのでした。

〔図3〕の赤い付箋が付いているのが明治天皇が名前を変えた部屋です。付箋をめくると元の名前が現れるというわけですね。たとえば、旧「御寝之間」は「雉子ノ間」に、旧「使者之間」は「溜ノ間」になりました。

御殿三層部（現・御常御殿）は「呈寿楼」と命名しているのですが、この名前には、帝国としての本格的な対外伸長との関連をうかがうことができます。

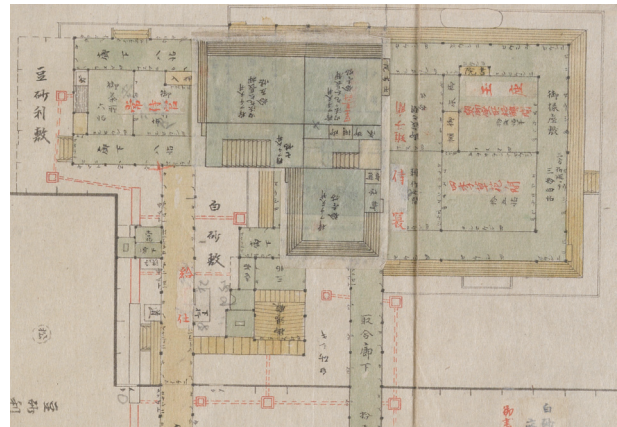
二条離宮の構造

二条離宮は ①外縁、②唐門から二の丸御殿、③本丸御殿、という三層構造を持っています。

外縁とは、外濠、東大手門、東南隅櫓あたりを指します。近世城郭の外観をしていますので、外国人旅行記に書かれていたような、「將軍」あるいは「武士」のイメージですね。

二の丸御殿は、武家の御殿（書院造）です。現在の観光客の多くも、まさにこの建物に惹かれて二条城を訪れているのではないのでしょうか。当時の内装は、明治宮殿の影響を受けた「和洋折衷」の明治様式です。「和」といっても、大和絵や、平安時代をモチーフにしたものです。そこに赤い絨毯を敷いて洋風にする、という一筋縄ではいかない構造を持っています。明治宮殿からの影響といえます。どっしりとして、どこか恐ろしい威容の「將軍（武士）」イメージ、一方で明治宮殿つまり「ミカド」のイメージもありますし、近代と古典とが複雑に錯綜する場となっています。

〔図3〕 本丸御殿



（宮内庁宮内公文書館所蔵「二条離宮本丸之図」）

す。

本丸御殿は、宮家の御殿で書院造です。二の丸御殿に比べると柱も細く華奢なつくりをしているのがわかります。内装は、1階のオモテに当たる部分はテーブルと椅子を置いて絨毯敷きが多かったようです。寝室や男性が使う部屋は洋風にしてあり、皇后・皇太子妃の使用する部屋は和風。あるいは時代によって全部和風にしたりと変遷します。3階からはアジアを展望するという構造になっています。同時に、元は桂宮の御殿だったという経緯から、一種のノスタルジアを醸し出している空間でもあります。

二条城は皇太子時代の大正天皇がよく訪れました。大正天皇は病弱だったこともあって、あちこちの離宮や御用邸に滞在することが多かったのですが、二条城もお気に入りの場所だったようです。新婚旅行でも二条城を訪れ、本丸御殿に滞在しています。大正天皇にとっては思い出の強い場所だったのです。

これらのことと、帝国としての歩みを踏み出した近代日本の姿が重なってくるのです。

2. 二条離宮の位置づけ

他施設との関連

ここで、外国人旅行者から「天皇の御所と将軍の城」として、二条城とは対比的に認識されていた京都御所をみていきましょう。近代化は御所においても進み、「京都御苑」のなかに「御所」があるという現在のような構造が作られていきます。1877年（明治10年）に始まった大がかりな保存事業（大内保存事業）は1883年（明治16年）に完了し、京都府から宮内省に移管されます。

御苑は一般民衆に開かれた公共空間として、一方で御所は拝観が限定されます（海外からの旅行者には許可されないという時代もありました）。御所は拝観のヒエラルキーを付けられた空間だったのです。

また、岡崎地区とも比較してみましょう。日清戦争、日露戦争の奉祝行事などは、岡崎から御所、あるいは二条城から御所という丸太町通で繋がれた3地点で行われるということがありました。

御所を中心に、左右対称の一翼をそれぞれ二条城と岡崎が担っていたということになります。1895年（明治28年）、この岡崎で平安遷都千百年紀年祭（第4回内国勸業博覧会）が開催されます。その一環として整備され、大内裏の一部を5/8の規模で復元したものが平安神宮です。もともとは神宮ではなかったのですが、神社になります。岡崎は伝統が志向される一方で、図書館、美術館など京都の近代化を象徴する空間にもなっていくのです。

次は東京と比べてみましょう。明治宮殿は1888年（明治21年）10月に竣工されますが、先に述べたように、和風／洋風論争がありました。内装は完全に洋風ですが、前述したように二条離宮の影響があるかもしれません。

明治宮殿も内部には固有の構造があり、表宮殿は公的空間、奥宮殿は私的な空間となっ

ています。小沢朝江氏⁽¹⁾は「近代日本におけるクラシカル・リバイバル」とそれを指摘しています。

二条離宮の黒書院の障壁画が新調されたのが、1899年から翌年にかけてでした。影響関係が相互であったことがやはり指摘できるように思います。

さらに、東京の旧東宮御所（現・迎賓館赤坂離宮）をみてみましょう。1909年（明治42年）に竣工されました。結局、皇太子時代の大正天皇が住むことはありませんでしたが、洋風の外観で、左右対称のつくりになっています。皇太子と皇太子妃の住空間が左右対称に配置されているのです。先にみた明治宮殿は、表宮殿／奥宮殿という分かれ方ですが、東宮御所では当時の西洋近代的な男性／女性の規範的なありかたが意識されていたのです。

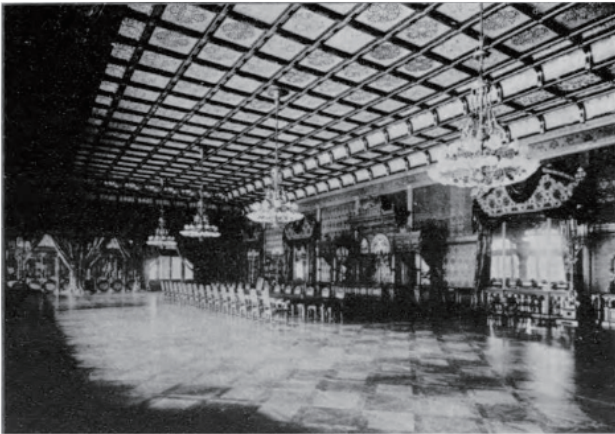
もう一つ面白いのが、このような西洋建築のなかに武士のデザインが混在していることです。本館の屋根には鎧武者の像があり、朝日の間の壁画には鎧兜が描かれています。兜の角の部分は、まるで対応するように鍬形と鹿の角の2種類があります〔図5〕。

二条離宮は外観が武士イメージで、中に入るにつれて宮家の様相を呈していくという構造になっていますが、一方、東宮御所はこのように西洋の意匠のなかに武士デザインが混在しているということになります。

各地の御用邸に目を転じると、ほとんどが和風建築で、内装は洋風であったり和風であったり、と混在しています。一般に皇族の住空間は、書院造の本邸は男性の使用、数寄屋造の多い別邸は主に女性の使用を想定していたといわれますが、和室は女性、つまり皇后や皇太子妃が生活する空間として想定された

(1) 東海大学工学部建築学科教授。工学博士。著書に『明治の皇室建築——国家が求めた“和風”像』（歴史文化ライブラリー、吉川弘文館 2008年）など。

〔図 4〕 明治宮殿（豊明殿）



（国立国会図書館デジタルコレクション『宮城写真帖』）

〔図 5〕 旧東宮御所（現迎賓館赤坂離宮）



（内閣府迎賓館赤坂離宮公式 Twitter

<https://twitter.com/cao_Geihinkan>）

〔図 6〕 二条城二の丸御殿大広間



という指摘もあります。詳しく分析すればもっと面白いことがわかってくるでしょう。

二の丸御殿の床の変遷

邨田丹陵の「大政奉還図」（1935 年）では

畳敷きの御殿が描かれていますが，〔表 1〕のように年代順にみていくと，まず 1885 年から翌年にかけての大修理では，板敷き・絨毯張になっています。それから，黒書院・白書院の御座の間を薄縁敷に変更したり，床の間だけ畳に張り替えたり，ということがありました。和風化が進んでいったと思われます〔図 6〕。

ただし，大正大礼の際には大饗宴場が新設され，二の丸御殿はその控え室として使用されるので，完全に絨毯張になります。

その後，大饗宴場が撤去され，元に戻される段階で，1919 年に黒書院・白書院に薄縁が敷き込まれます。翌年には二の丸御殿全体が薄縁敷になります。邨田がこの絵を描いた前年の 1934 年の「工事録」でも，黒書院その他で薄縁の表替えが行われたことが確認できます。邨田はきれいになったばかりの御殿内部を写生して描いたのかもしれませんが。

離宮の境界 —— 周辺の土地利用

二条離宮の外側にも目を向けてみましょう。このころから，都市インフラの整備にもなって，二条離宮の外縁部の土地を使わせてもらえないだろうか，と打診を受けるようになります。1900 年（明治 33 年）には，外郭南側道路に電柱を設置させてくれとか，市電が通るので待合所を作らせてくれ，というような申し出がありました。第二高等女学校の給水管を作りたい，あるいはガス管を作りたい，といった工事も許可しています。

神泉苑から水を分けてくれないかという申し出もありましたが，これは断っています。ですが，外濠周囲の都市インフラ利用については許可しているというわけです。

さらに，大正大礼をメルクマールとして，だんだん都市インフラだけでなく，空きスペースの有効利用が図られるようになります。東大手門前の広場を使用したいという申し出もなされます。大饗宴場など大正大礼時に増設された建物が下賜されるときも，解体・搬出した資材の一時的な保管場所として，北側

〔表 1〕 二の丸御殿の床の変遷

1885～1886 年大修理	板敷、絨毯張
：	黒書院・白書院 各御座の間を薄縁敷に変更。
：	床の間の床 畳張替。
1915 年大正大礼	大饗宴場の建設にあわせて二の丸御殿床を絨毯張に変更。
1919 年	黒書院・白書院で絨毯撤去。薄縁敷込工事。
1920 年	二の丸御殿全体が薄縁敷に。

〔表 2〕 二条城周辺の都市インフラ整備と空地有効利用

1900 年（明治 33 年）	外郭南側道路に電柱を設置。
1908 年（明治）	東南部の堀川押小路に京都電気鉄道堀川線の待合所を設置。（1912 年撤去）
1912 年	第二高等女学校給水管敷設。
1912 年	電柱設置。
1912～1913 年	給水管・ガス管敷設工事。
1915 年	大正大礼
1916 年	大饗宴場搬出資材の一時保管場所として周囲空間の利用。
1920 年	京都市撤水事業用車両の倉庫設置。
1928 年	昭和大礼のための車両置き場・資材置き場としての利用。

の土地の無償使用が許可されています。

車両置き場としても使われたようです。昭和大礼（1928 年（昭和 3 年））では二条離宮は会場としては使用されず、御所で行われたのですが、その際の車両置き場に使用してほしいという申し出があったようです。

こうした事例からは、時代が下るにつれて、次第に離宮と市街地との境界が曖昧にぼやけてきた状況が読みとれるかもしれません。

岡崎地区あるいは京都御苑は、市民のための公共空間でしたが、二条離宮は濠の向こうの「城」であり「離宮」であって、公共空間ではありません。市民は基本的に立ち入れないのです（二条城の拝観にまつわる規則の変遷については、今後ぜひ調査を進めていただきたいと思います）。ある種の孤絶した空間が、どんどん周囲から浸食されて、境界がいまいになっていく。大きくはその流れのなかで、京都市に下賜されることになっていくのではないかと思います。

3. 移管の検討 京都市への下賜へ

1923 年（大正 12 年）、関東大震災が起こります。関東地方の御用邸が大破したこともあって、皇室財産の確保とともに、全国の不要な離宮や御用邸を長期計画で整理していこう、という動きが出てきます。

二条離宮も議論の俎上に上がっています。「不使用宮殿」という分類がなされて、その上で置いておくべきか、廃止すべきかという議論が行われました。

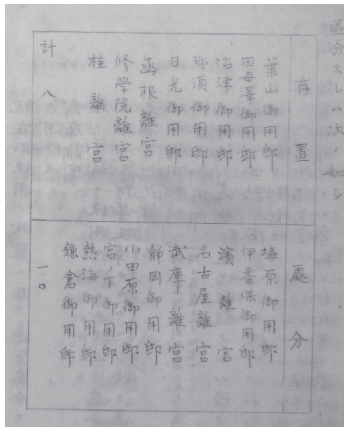
二条離宮は、常時使用されない「不使用宮殿」のなかで仙洞御所、桂離宮と並んで「存置スヘキモノ」に、さらに分類されます。理由として「歴史的建設物トシテ且又臨時使用サセルモノトシテ存置ノ必要アルニヨル」と添えられています〔図 7〕。名古屋離宮（名古屋城）などは処分の対象になっていますね。

議論のなかでさまざまな意見が出されたことが〔図 8〕「離宮御用邸等ノ整理に関する諸意見」という史料からわかります。三つの意見が並置されています。「第一」は廃止（国へ移管）、「第二」は存続（史跡、臨時御使用）、「第三」は廃止（国または府へ移管）です。

面白いことに、二条離宮は本文中では「存置」となっているのに、なぜか末尾の表の「存置」一覧には入れられていないのです。

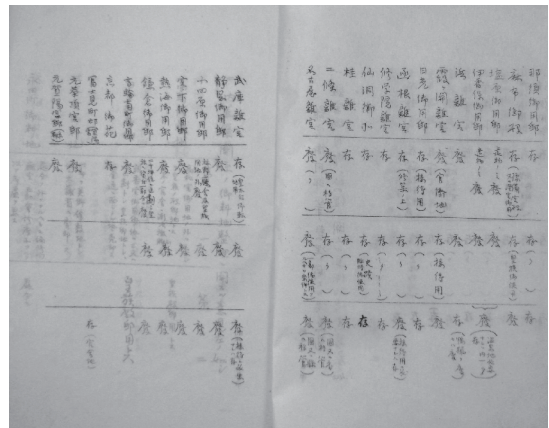
二条離宮には、当時も現在も独特の「とらえどころのなさ」があるのではないかと思います。「城」と呼ばれているけれども、天守閣がそびえているわけでもない。海外の人たちには、將軍の御殿だと思われる。でも、市民には開かれていなかった。このような特徴は、御所や岡崎など他の施設にもないし、東京の明治宮殿ともことなっています。それ

〔図7〕「離宮御用邸ノ処分」(1927年7月6日)



右ページ最後に二条離宮が挙げられているが、なぜか左ページの「存置」には入っていない。

〔図8〕「離宮御用邸等ノ整理ニ関スル諸意見」(1927年7月22日)



(宮内庁宮内公文書館所蔵)

が「城」という言葉に凝縮されているようです。大げさにいえば、帝国期の日本を象徴するような構造をしていたのではないかとも思われるのです。

そして、結果的には1939年(昭和14年)10月25日、二条離宮は京都市に下賜される運びになりました。

おわりに

今回の歴史調査では、京都市に下賜される前後の時期の史料がほとんど調査できませんでした。特に、京都市民が下賜をどう受け取っていたかということは「元離宮二条城」の起点になるところかもしれません。他の施設との関連や拝観規則の変遷、京都市への移管プロセスなども重要なポイントでしょう。

なかでも拝観規則の変遷については、御所と比べて二条離宮はどうだったのかも比較でき、面白いと思います。二条離宮独特の形が見えてくれば、御所に対する二条城という特色も明らかになってくると思われます。

今後さらなる調査・分析によって、この時期の全体像がいつそう鮮明になることが期待されます。

(令和3年〔2021〕3月2日)

小田 龍哉／おだ りょうすけ●1973年生まれ。同志社大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文化史学)。思想史・文化史。著書に『ニニフニ 南方熊楠と土宜法龍の複数論理思考』(左右社、2021年)。論文に「慈雲と雲照の十善戒 規範と主体とをめぐる考察」(アリーナ 23号, pp. 449-459, 2020年), 「「妖怪学」と「事の学」」(熊楠研究第13号, pp. 151-181, 2019年)など。

大正大礼の饗宴場について

京都市文化財保護課 文化財保護技師（建造物担当）
原戸 喜代里

1. 大礼とは

今日は、二条城の離宮時代に起こった大きな出来事の一つである大正大礼と、その饗宴の様子をお話しします。

まずは、天皇の即位儀式について、前近代の様子をお話しし、その上で近代の即位の儀式がどのようなものであったかを見ていただこうと思います。

新天皇が即位するためには多くの儀式が執り行われますが、大礼とはこのような天皇の皇位継承のための一連の儀式をいいます。その中でも、中心となる即位の儀式は三つの儀式で構成されていました。皇位の継承を神に報告し、即位を国民に披露する「即位礼」、天皇がその年の新穀を神に供えられ、また自らも食し、国家の安寧と五穀豊穡を感謝し、祈念する「大嘗祭」、そして即位の祝宴「大饗」です。

〔図 1〕 令和の即位礼正殿の儀（皇居正殿）



（宮内庁ウェブサイト

<<https://www.kunaicho.go.jp/odaigawari/sokuireiseiden-nogi-ph.html>>）

令和の大礼

令和の天皇の即位儀礼は、令和元年（2019）に行われたので、みなさん記憶に新しいと思います。「即位礼正殿の儀」は10月22日に行われ、即位のための大切な神事である「大嘗祭」は11月14日、15日に皇居東御苑にて行われました。

国王や元首ら各国の要人が出席する「饗宴の儀」は、昭和以降に大がかりになっていったものですが、10月22日、25日、29日、31日に行われました。「大嘗祭」の祝宴である「大饗の儀」は、新しく収穫された米で作られた白酒、黒酒及び酒肴を、天皇が出席者に振る舞う饗宴で、11月16日、18日に行われました。

即位礼や饗宴の儀、大饗の儀は皇居内の建物が使用されましたが、大嘗祭のための建物は皇居東御苑に古式に則って新しく「大嘗宮」が造営され、儀式終了後に解体、焼却されました。このように現在の即位儀礼では、既存の建物が使用されるため、儀式に使用された建物が下賜されるということはありませんでした。

一方、大正と昭和の大礼は、皇居のある東京から京都に移動して執り行われました。式場となった京都御所等には、大嘗宮以外にも多くの建物が造営され、儀式が終了すると各地に下賜されました。

2. 近世までの大礼

即位礼の変遷

これら即位の儀式は、古代より時代に応じ

て変化しつつ執り行われてきました。これまでどのような変遷をたどってきたのか、まず即位礼から見ていきましょう。

天応1年(781)の桓武天皇の即位式から元暦1年(1184)の後鳥羽天皇の即位式までは、大極殿⁽¹⁾が主に使用されました。途中、火災等の焼失で大極殿が使えなかった時には、豊楽殿⁽²⁾や紫宸殿⁽³⁾等で代用されました。安貞1年(1227)に起こった火災で大極殿は焼失しますが、その後再建されることはなく、太政官庁⁽⁴⁾で即位式が行われるようになりました。

室町時代の中頃からは、太政官庁も荒廃したため、後柏原天皇の即位式以降は、紫宸殿で行われています。

紫宸殿で行われた近世の即位礼の様子が描かれた図が残されています[図2]。大極殿や紫宸殿の南庭に並べられた幡には、白虎や青龍等四神が描かれ、庭上には香炉がおかれています。焼香は、その煙が天に天皇の即位を告げるという中国の故実になったもので、近世までの即位式は中国風の様式が色濃かったことがわかります。

大嘗祭の変遷

次に大嘗祭について見ていきましょう。

大嘗祭とは、天皇の一代一度の大神事です。桓武天皇の大嘗祭は太政官庁で行われたものの、その後は大極殿の南庭で行われました。

大極殿が焼失した時には、太政官庁や紫宸殿の南庭で代用されました。

中世から近世にかけては、皇室の式微^{しきび}や戦

乱のために大嘗祭は中断していましたが、貞享4年(1687)の東山天皇の時に再興され、弘化4年(1847)の孝明天皇の大嘗祭まで、紫宸殿の南庭で行われました。この神事を執り行う場として、大嘗宮や廻立殿という建物が儀式のために新たに建てられました。

「養老律令」の施行についての細かな規則をまとめた古代の法典『延喜式』には、これらの建物の仕様や、造営についての詳細な取り決めが記されています。

紫宸殿南庭に建てられた大嘗宮は、大嘗祭が終わるとすぐに取り壊され、鎮祭^{ちんさい}が行われました。その後、豊明節会^{とよのあかりのせちえ}などの饗宴が3日間、豊楽殿で行われました。

これらの節会^{さいかい}は、大嘗祭の斎戒を解くための儀式であったといえます。節会を行った豊楽殿は康平6年(1063)に焼失してから再建されることがなく、代わりに大極殿や紫宸殿で行われ、近世に大嘗祭が再興された後には紫宸殿が使われました。

3. 近代の大礼

明治の大礼

慶応3年(1867)、王政復古の大号令が発令され、明治政府による天皇を中心とした体制の大転換に伴って、明治天皇の即位儀礼についても旧来の中国風の様式が一新され、新しい時代に相応しい日本固有の儀式が創り出されました。

明治天皇の即位式は、慶応4年(1868)8月に京都の紫宸殿で行われました。[図3]は即位式の様子ですが、四神の描かれた旗や香炉をやめて、日月の幣旗^{へいはた}、地球儀や奉幣案^{ほうへいあん}が庭上に置かれています。また、参列している人も、皇族や公家に加えて、武家出身の新しい政府の役人が即位式に参加しています。

明治の大嘗祭は、明治4年(1871)11月に東京の吹上御苑で行われました。大嘗祭の神事については、旧来の様式がほぼ踏襲されましたが、神事後の節会^{せちえ}は、大きく変化しました。2日間行われていた節会を1日とし、そ

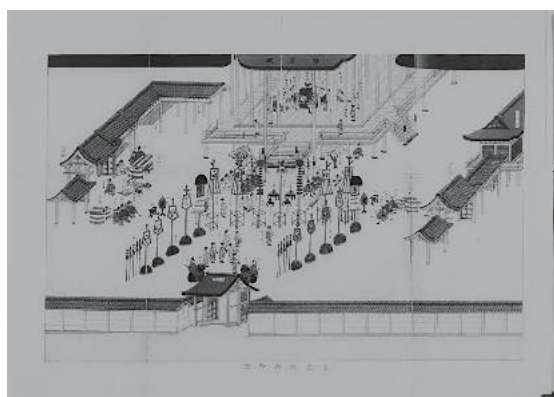
(1) 古代の大内裏の正殿。

(2) 平安京大内裏の院の一つ。朝廷の饗宴に用いられた。

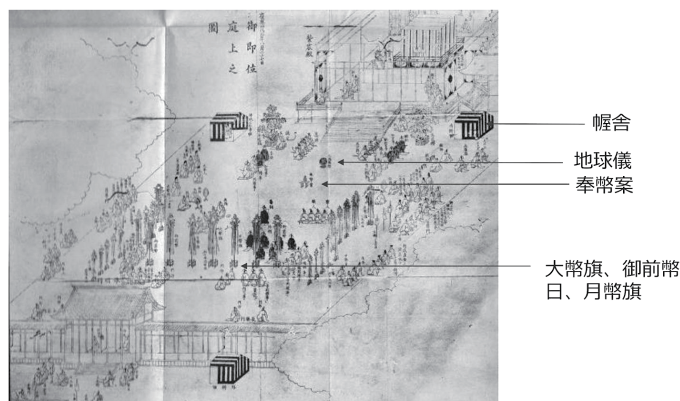
(3) 本来天皇の私的な在所である内裏の殿舎の一つだったが、平安中期以降、大内裏の正殿であった大極殿が焼失したことにより、即位・節会などの重要行事も行われるようになった。

(4) 律令官制としての太政官の役所。古くは国政を処理するところだったが、列見などの儀式も行なわれ、中世以後はさらに即位や大嘗祭も行なわれた。略して官庁。

〔図 2〕「紫宸殿御即位」



〔図 3〕「御即位庭上之圖」



(いずれも国立国会図書館デジタルコレクション『御大禮圖譜』)

の翌日に豊明節会^{とよのあかりのせちえ}の饗宴が皇城の大広間で行われました。また、東京のみでなく、国内の各地で饗宴が設けられました。

さらに、幕末に海軍施設として浜離宮に建てられ、明治2年(1869)に迎賓施設として改修された延遼館^{えんりょうかん}では外国公使^{きょうせん}の饗饌が行われました。これは、政府が国際社会に対応した即位の祝宴を開催するために新しく設けられたものでした。

このように、明治の即位儀式は新しい時代に応じて大きな変化がもたらされましたが、大嘗宮は古式に則り、儀式のために新しく造営され、一般に公開した後、焼却されました。

即位礼や饗饌は、近世同様、既存の建物で行われたために建造物を新しく建て、それらが下賜されることはありませんでした。

旧皇室典範・登極令の制定

明治22年(1889)、皇室に関する重要事項を定めた法律である旧皇室典範が制定されました。この法律により、「即位ノ礼及大嘗祭ハ京都ニ於イテ之ヲ行フ」と規定されました。

これは明治天皇が明治11年(1878)に京都を訪れた際、東京に都が移った後の御所の荒廃を目にして心を痛め、御所の保存を命じたこと、また、ロシアでは政治の中心が首都サンクトペテルブルグに移った後も、歴代のロシア皇帝は戴冠式を伝統的な文化の中心地である旧都モスクワで行っていることに倣って京都を旧都として位置づけ、将来日本の大礼は京都において挙行するようとの考えを

示したことによります。これを受けて明治政府は、日本が欧州と肩を並べる「一等国」となるためには、皇室儀礼における「旧慣の保存が不可欠」として、京都を文化的都市として位置づけ、即位礼及び大嘗祭が京都で行われることになりました。

即位礼や大嘗祭といった即位儀礼は、天皇の即位を国内外に知らせ、国民を統合することを目的として運営するべきであり、近代における即位儀礼はどうあるべきか、近代的な皇室の儀礼制定の必要性が叫ばれました。

そこで大礼使長官官房は、「近代における即位儀礼のあるべき姿」を模索すべく、イギリス、ロシア及びドイツの戴冠式の調査を実施しました。これを参考に、明治政府が思い描く「近代における即位儀礼のあるべき姿」^{とうきよくれい}を定めた「登極令」が、明治42年(1909)に公布されました。

登極令では、「即位儀礼は秋冬の間に京都に移動して行い、大嘗祭は即位の禮のあとに続けて行う」と即位礼と大嘗祭を一体化させて、その後に大饗を行うよう定め、また、「大饗ハ豊楽殿ヲ裝飾ス」と将来豊楽殿の造営を想定して、大饗第一日の儀は豊楽殿において行うことと規定しました。

登極令は、西洋の戴冠式を参考にしつつ古来の儀礼の伝統を重んじて儀式を執り行うよう、その内容が規定されました。こうして、大正大礼は登極令公布後、初めて挙行される近代的な即位儀礼となりました。

大正の大礼

旧皇室典範及び登極令で、天皇の即位儀礼は京都で行うと定められたため、初めての近代的な即位儀礼「大正大礼」が、大正4年(1915)11月に京都で行われました。

皇位継承は、明治天皇が崩御した明治45年(1912)7月30日の踐祚の儀式に始まり、その後1年の諒闇(喪)を過ごし、諒闇が明けた後に通常は大礼が行われるのですが、諒闇の間に昭憲皇太后が崩御したため1年延期されました。

大正4年11月京都にて、即位礼、大嘗祭、大饗の三つの儀式が行われました。即位礼は京都御所の紫宸殿で、大嘗祭は仙洞御所内で行われ、その後の大饗は二条離宮(二条城)で行われました[図7]。京都御苑内や二条離宮内には国内外から多数の儀式の参列者を迎えるための朝集所等の施設、厩舎や自動車車庫等の附属施設群等、あわせて約12,000坪もの仮設建造物が新しく造営されました[図6]。

この近代的な即位儀礼は、従来よりも祭典としての性格が拡大し、京都市内各所に装飾が施されました[図8]。

京都駅前には奉祝門が設けられました。大通りだけでなく、町家が建ち並ぶ通りや市電も飾り付けられました。日彰小学校の校門はおそらく杉の葉で飾り付けられています、このような緑の門があちこちでみられたようです。

昼だけでなく夜も橋や市電などが電飾され、大礼期間中の京都は天皇を迎える奉祝のムードで溢れていました。

大礼が挙行された式場は、儀式終了後国民に対し拝観期間が設けられ、非常に多くの拝観者が訪れました。この拝観もまた、国民に天皇の威容と即位を周知するためのツールであったと言えます。拝観期間終了後、儀式のために造営された仮設建物は取り解かれ、京都府内の各所へ下賜されました。

近代的な即位儀礼の中にあって、大嘗祭は古式に則って行われており、大嘗宮の用材は、

[図4] 大嘗宮用材の焼却の様子(賀茂川上流)



(京都府立京都学・歴史館 京の記憶アーカイブ「大正大礼京都府記事関係写真材料」)

拝観期間の後取り壊され、下賜されることなく賀茂川の上流において焼却されました[図4]。

4. 大正大礼の饗宴場

饗宴場計画の方針

次に、二条離宮で行われた大饗のためにどのような準備がなされたのでしょうか。

登極令によると、即位礼及大嘗祭後大饗第一日の儀は「豊楽殿ヲ装飾ス」と規定されていました。明治42年(1909)の登極令制定時は、将来的に豊楽殿が造営される前提でしたが、実際には「大饗ヲ行ハセルベキ豊楽殿ハ現在其(その)殿舎ナキヲ以テ二条離宮ヲ豊楽殿ノ用ニ充テル」とし、大饗の儀を行うために二条離宮に新しい饗宴場が造営されました。

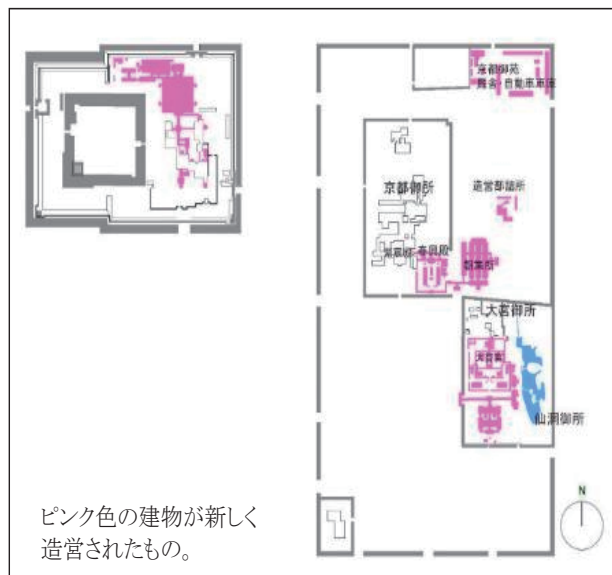
大礼のための建物は、京都御所に建てられた春興殿は大礼後もそのまま置かれることから永久保存の構造とされましたが、その他一切の造営設備はすべて大礼期間に限定した「一時適応ノ構造ト為セリ」と当初から、仮設建物と想定されていたのです。

饗宴場は2,500人余りの招待客を予定していたため、広大な建物が必要でした。さらに、秋冬なので暖房設備が必要です。「結構ノ意匠ヲ豊明殿ニ擬シ更ニ現代建築ノ技術ヲ畫シ内部ノ装飾ハ純粹ノ国風ヲ主トシテ毫モ秦西

〔図 5〕大正天皇の即位儀式の日程

踐祚	明治45年(1912) 7月30日	明治天皇崩御 大正天皇 踐祚の儀式
諒間	大正元年(1912) 9月13・14日	明治天皇 大喪の礼 帝国陸軍青山練兵場 (現・明治神宮外苑)
	※大礼は当初大正3年に挙行予定であったが 同年4月昭憲皇太后崩御により1年延期された	
大礼	大正4年(1915) 11月10日	即位礼 (京都御所紫宸殿)
	11月14・15日	大嘗祭 (仙洞御所)
	11月16・17日	大饗 (二条離宮饗宴場)

〔図 6〕(左) 二条離宮建物配置図(右) 京都御苑建物配置図



〔図 7〕大正大礼の儀式



〔図 8〕大正大礼時の装飾



〔図 9〕(左) 大礼の会場、京都御苑にむかう行幸の列 (中) 饗宴場に向かう皇族 (右) 儀式終了後、饗宴上拝観の様子



(いずれも京都府立京都学・歴史館 京の記憶アーカイブ「大正大礼京都府記事関係写真材料」)

ノ技巧ヲ加ヘス純雅ナル古代ノ典儀ト絢爛タル現代ノ禮容ト相適應シテ」(『大禮記録 卷百一』) つまり、豊明殿にならい、さらに現代建築の技術を採用し、内部の装飾は国風を主として西洋の意匠を加えず、古代の典儀と絢爛たる現代の礼容を併せ持った饗宴の造営が計画されました。

朝集所をはじめ、その他の建物については、「二条離宮南及東車寄ハ宏壮ナル二ノ丸宮殿ニ接續スルヲ以テ各屋根ノ葺ニ破風ヲ附シテ外觀ノ美趣ヲ加ヘ又二条離宮南大手門ハ城郭ノ外觀ヲ顧慮シテ之ヲ瓦葺トシ第二朝集所以下ノ各建物ハ専ラ費用ヲ旨トセルヲ以テ一部ヲ天幕布設ト為セリ例ハ二条離宮喫煙室ノ如キ単ニ天幕張ノ内部ニ杉葉装飾ヲ施セシニ過キス」(前掲書) つまり、南と東に設置する車寄せは二ノ丸宮殿に接するため破風をつけて外觀の美趣を加え、また南大手門は城郭の外觀を顧慮して瓦葺とする、としました。それ以外の建物はコストを抑えて一部を天幕布設とする、とあります。喫煙室も単に天幕張の内部に杉の葉で装飾を施す程度とされました。

関連施設の造営と修繕

宮殿内は絨毯が敷かれ、白書院は天皇の休憩室、黒書院は皇族の休憩室、大広間ほかの各殿舎は当日の朝集所(饗宴が始まるまでの待合室)とされました。大広間の南方と台所の東端には車寄せが設けられ、蘇鉄の間の北側壁を撤開して饗宴場に至る渡廊下が造られ、その中ほどから東西に通じる渡廊下が設けられて白書院や台所につながられました[図 11]。

台所の内部も改造されて大礼使職員の詰所にあてられ、その南、今の御清所の内部が装飾されて喫煙室となり、さらに大広間の北渡廊下東方と遠侍の間の北に天幕張喫煙室が設けられました。たばこは当時、紳士のたしなみとして欠かせないものだったので、意匠を凝らした喫煙室が備えられたのです。

そのほか、南大手門が新しく造られました。

建物の造営のほか、周辺では新しく街灯が設置されました。二条離宮の外構は、もとは「市内の夜景と同じく装飾及び電飾を施すべき」計画でしたが、単に外構を照らす街灯の設置にとどめられました。

既存の二ノ丸宮殿は大饗の朝集所などに使われるため、修繕が行われました。北大手門の見張り所が設けられたり、給水設備が設置されたり、台所付近の消火栓の移転などが行われました。

饗宴場の新造営

もともと饗宴場は二ノ丸宮殿の西南に造営される計画だったのですが、大饗の招待客の増加等の理由により、饗宴場と舞楽場を同じ建物に収容して「舞楽場を中央にして饗宴場をその外周に配置する」ようになりました[図 14]。

建築の主旨によると、「内部の壁面には西陣織緞子を張り、壁代を掛け、翠簾^{すいれん}を垂らし、天井は折り上げ格天井で朱色塗の格縁^{うんげん}、縹縷^{はなはざま}模様^{きくきりばな}に極彩色を施し、欄間は花狭間組子の中央に菊桐花と十二支にちなんだ彫刻をはめ、屋上からの採光装置をなし、かつ電飾を施し饗宴場の床面をリノリウム敷」にされました。

明治 21 年(1888)に竣工した明治宮殿は、京都御所を模した和風の外觀に、椅子やシャンデリアのある洋風の内装という和洋折衷の様式を持つ木造建築でした。明治宮殿は「外部は和風であるが、内部、特に儀式や外国の賓客が謁見される表宮殿は、いくつかの形状の格天井や絨毯敷をはじめ暖炉やガラス入りの扉や建具が入り、シャンデリアが吊され外国から輸入の調度品が並べられるといった和洋折衷形式」(鈴木博之『皇室建築 内匠寮の人と作品』建築画報社、2005)であり、「二重折上げ格天井は、正殿・饗宴所(豊明殿)にて使用され、正殿や饗宴所等の重要諸室には格天井を黒漆塗と鋳り金具で飾り格子内の平面には花模様の絵柄を施し、室空間に華やかさを演出している。」(前掲書)とあります。

近代の皇室の建築では、儀式や外国の賓客

との謁見の場は、床は絨毯敷、天井は書院造の中で最も格式の高い二重折上げ格天井を採用し、その天井からシャンデリアを吊るという和洋折衷の意匠が多く用いられました。

先ほど見ていただいた大正大礼の饗宴場内部の完成の写真〔図7〕も、この明治宮殿の内部によく似ていることがわかります。

大礼の大饗の饗宴場もまた、国内外の賓客を迎えるに相応しい場として、明治宮殿の饗宴所の形式を踏襲したものと考えられます。

11月16日、17日が大饗の儀でしたが、饗宴場の北西に位置する調理所は、大饗の一週間前の11月9日に完成しました。

儀式の様子

大饗第一日の儀には皇族、外国公使、内閣の大臣、有爵者らが夫人を伴って1,300人参列しました。饗宴場北部中央に御座所が設けられ左右に地方風俗歌の屏風が飾られました。天皇には白酒、黒酒と白木折敷に土器盛の式餞、その他の参列者には白木折敷に磁器盛の饗餞が配膳されました。大饗第一日の儀では、天皇と参列者の饗膳は区別されているのです。

近世までは、大嘗祭が終わると豊明節会が行われました。この豊明節会をもって斎戒が解かれました。大正大礼の大饗第一日の儀は、

大嘗祭の斎戒を解く豊明節会の役割を果たす儀式で、舞楽場では、久米舞、風俗舞、五節舞が演じられました。

第二日の儀は、ヨーロッパの形式に則って催されたため参列者の饗膳を区別されことなく、料理は全て西洋料理で、饗宴の間舞楽場ではヨーロッパの管弦楽が演奏されました。

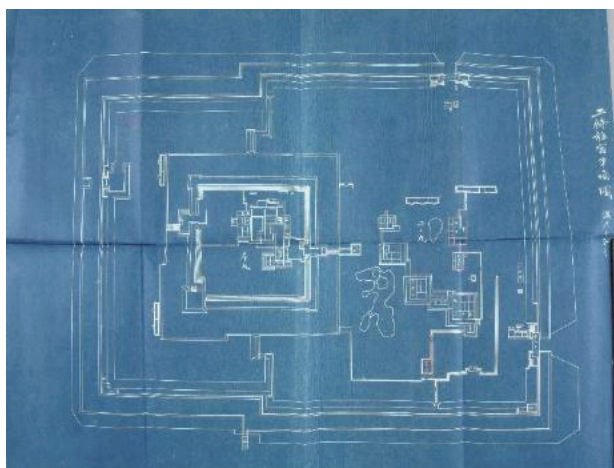
この儀式には、大勲位、8大臣以下貴衆両院議長及び夫人、外国使節及び夫人、供奉勅任官、女官等、日本人86人、外国人88人が参列しました。

大饗夜宴の儀は、大饗第二日の儀に引き続いて行われました。第一日の儀の参列者に加え、貴衆両議員も参列し総数1,988人と饗宴の中で最も大規模なものでした。

舞楽場では万歳楽、太平楽が行われました。舞楽が終わると西洋料理が饗され、饗宴の開始とともに宮中雅楽部、海軍音楽隊、陸軍音楽隊が交互に演奏をしました。

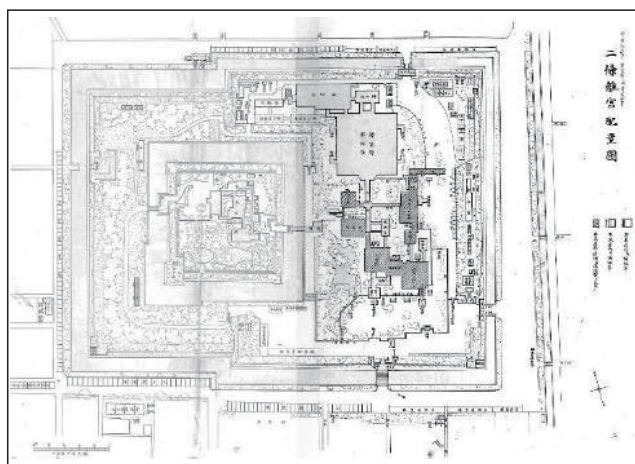
大饗の儀式は、古来の伝統を重んじつつ、時代にも適応する近代国家としての日本の姿と天皇の威容を内外の招待客に実感させる儀式として非常に重要でした。大饗の三つの饗宴は、それぞれ異なった意味、目的を持ち、それに応じて饗宴の形式や内部のしつらえも変えられました。

〔図10〕（左）饗宴施設造営前の二条離宮平面図



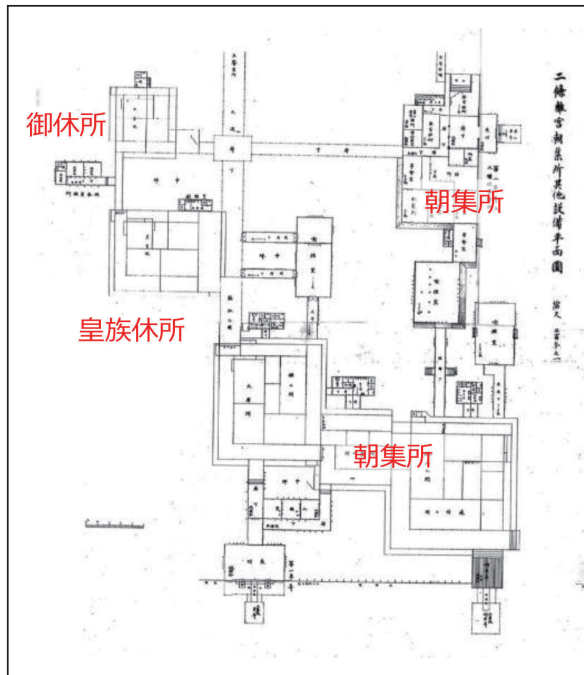
（国立公文書館所蔵）

（右）大饗を挙行するための施設計画配置図。濃い灰色は既存建物の修繕・改修。薄い灰色は新しく造営された建物。



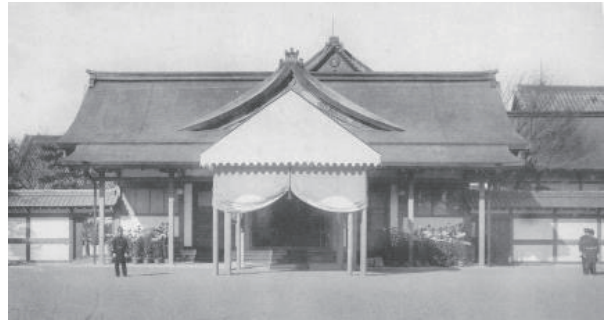
（宮内庁宮内公文書館所蔵）

〔図 11〕「二条離宮内朝集所其他設備平面図」



(宮内庁宮内公文書館所蔵)

〔図 12〕 大広間南方の車寄せ。テントが設置されている



〔図 13〕 大広間の北に作られた喫煙室



(宮内庁宮内公文書館所蔵

『御即位礼及大嘗祭諸設備写真帖』より)

5. 饗宴場の下賜

下賜先の傾向

大正大礼終了後、大礼の建物は撤去され、大礼が行われる前の状態に復旧されました。「長押塀ヲ再建シ敷地ハ土管其ノ他ノ埋設物ヲ撤去シ砂利敷又ハ芝張トシ庭苑ハ苑路ノ築造樹木ノ捕植等ニ因リテソノ風致ヲ整へ総テ其ノ旧ニ復セシメタリ」(『大礼記録』国立公文書館所蔵)

大嘗宮は神聖なものとして旧来通り焼却され、京都御所の春興殿等は、先述のとおり大礼後もそのまま残され宮内省の所管となりましたが、その他の建物は取り解かれて京都府下に限定されて下賜されました。

宮内省から直接下賜された5団体のほか、京都府がいったんまとめて下賜建物を受け取り、京都府が府下64の団体に下賜しました。

〔図 18〕は、大礼で建てられた建物の処分坪数の割合を示しており、造営された建物全体の76%が下賜されています。うち半分は

教育施設、つまり学校への下賜です。なかでも小学校と高等女学校への下賜が多くなっています。

大正初期は、近代教育制度、特に学校制度の整備が推進された時期であり、小学校の児童の急激な増加により学校設備の急速な拡充が求められました。また、この時期、京都では仏教やキリスト教教団が経営する学校が多数開校しています。大礼の仮設建造物の下賜先にもこれらの学校が見られました。

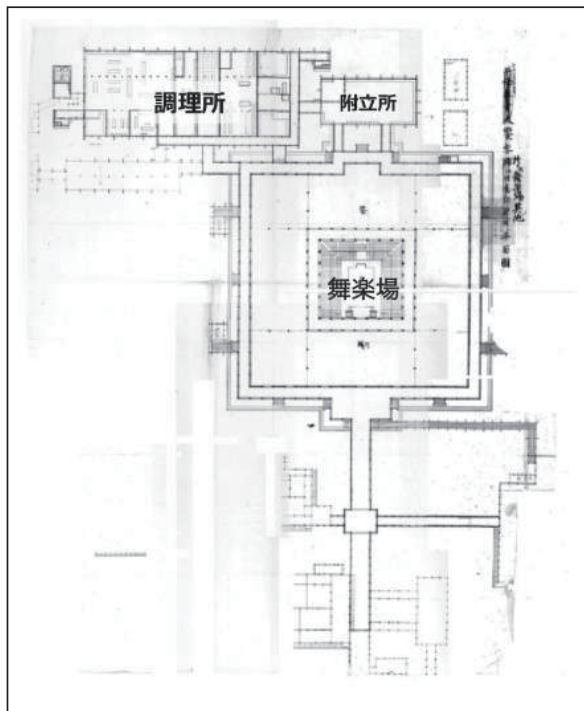
饗宴場の下賜の事例

饗宴場と台所前の第二車寄は、京都市に下賜されました。

饗宴場は、岡崎で京都市公会堂となりました。『公会堂建築概要』によると「殆ント当時ノ原形ヲ保持シ饗宴場ノ中央ニ設ケラレタル舞樂場ヲ以テ主体ト為シ之ヲ大集會場ニ充テ」とあり、内部の写真をみると饗宴場内部の面影が残っていることがわかります〔図 19〕。

饗宴場附属調理所は、第三高等学校に下賜されて、これを用いて新徳館という講堂が建

〔図 14〕「饗宴場及舞楽場其他平面図」



(宮内庁宮内公文書館所蔵)

設されました。この第三高等学校には、京都御苑内の第二朝集所車寄も下賜されていて、尚賢館という集会施設に転用されました。

第三高等学校ではこれらの下賜について、「母校の懇願に對し御大典用臨時造営物中、第二朝集所御車寄及び二條離宮内饗宴場附属調理所下賜の御沙汰に接し、直に之を校内に移轉し、且つ右朝集所は、略ほ原形のまま併せて之を移築することとなりしのみならず尚右調理所は母校より建築材料として全部之を交附せらるることと関係者のなりしたれば両者相俟つて、益々大典記念の趣旨を深くするに至れる」(『第三高等学校創立満 50 年大典記念館落成記』京都大学文書館所蔵)と下賜された建物を転用し新しい建物を建てることで大礼を記念しようとしたことがわかります。

大覚寺には、第一車寄が下賜されました。嵯峨天皇などの像が祀られた「心経前殿^{しんぎょうぜんでん}」として転用され現存しています。

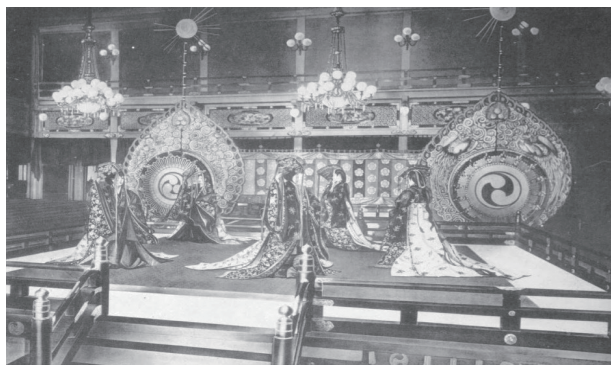
この心経前殿の工事仕様書には、大正大礼の下賜材を使用して建築するといった文言は見当たらず、見積書の内訳備考欄に「下賜材使用」という言葉が出てきます。古材は、屋根

〔図 15〕大饗第一日の儀



(国立公文書館所蔵)

〔図 16〕五節舞



(国立国会図書館デジタルコレクション『御大礼記念写真帖』)

の構造材や床の根太、柱の一部等に使用され、建具や金物は下賜されたものが補修して使われています。

大饗宴場の渡廊下は、下賜材が松林院(上京区)の本堂に転用されました。渡廊下に使用されていた釘隠しなどの金物や建具も補修されて使用されています。

仙壽院(右京区)では、下賜材は後水尾天皇の木像を安置するためのお堂「法皇殿」に転用されています。法皇殿には、饗宴場の渡廊下としての面影はなく、取り解かれた渡廊下は、あくまでも建築材料として使用され、全く新しい建物に生まれ変わっています。

仙壽院では、当時、お寺が経済的に非常に苦しい時期であり、無償で入手できる建材として大礼の建物の下賜を願い出たのだらうということでした。

大正大礼の建物の下賜では、下賜された建物を生かして天皇の即位を記念しようとする一方で、当時の尋常小学校のように、児童数の増加による深刻な教室不足のため早急に教

室を整備する必要から、無償で大量に建材を入手するために下賜を願い出たという経済的な要因が見られます。今日、御紹介した饗宴場の建物の下賜の事例を見てもその傾向がみられます。

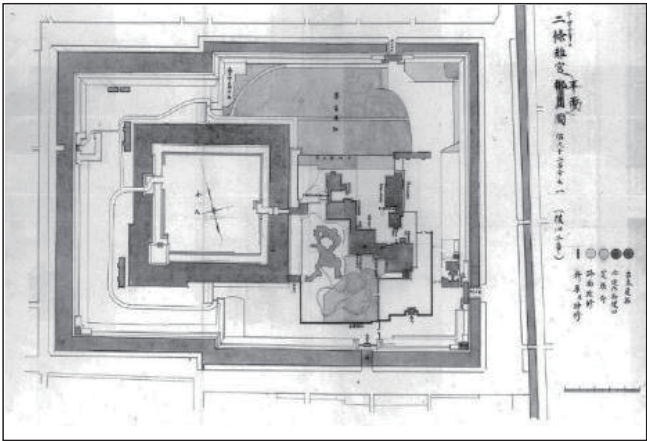
昭和大礼で造営された建物群も大正大礼と同様、各地に下賜されますが、その下賜建物の転用の様子をみると、大礼という盛儀を永く記念したいという願い、天皇だけでなく天皇の即位儀礼に関わった建物そのものに対する崇敬がより強くみられるようになります。

このように大礼で下賜された建物をどう転用しようとしたかを調べてみると、当時の社会状況や人々の意識を見てとることができるのです。

6. さいごに

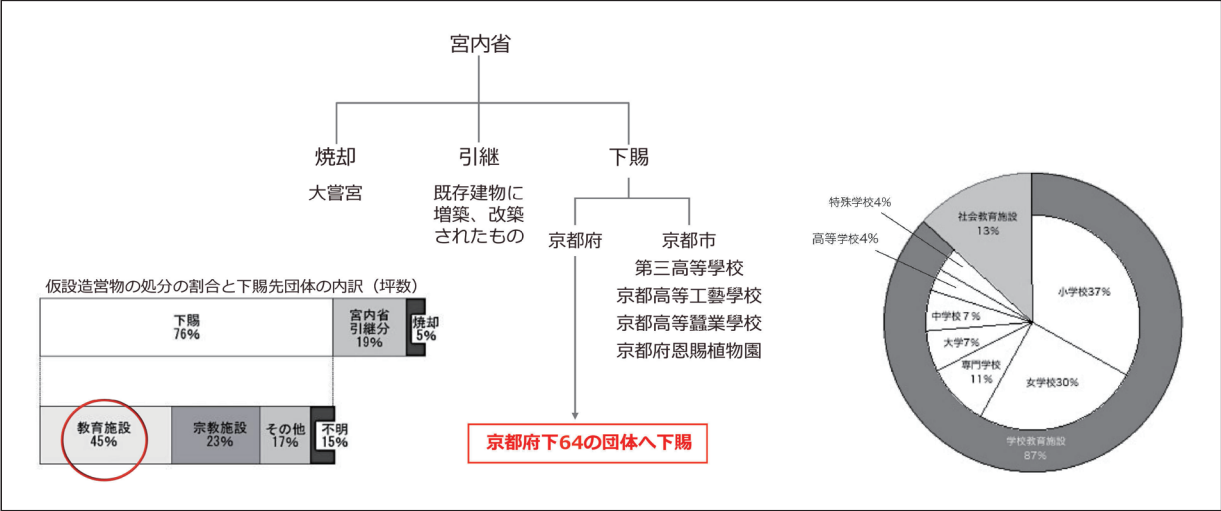
最後に大正大礼、そして二条離宮とは話が離れますが、現存している昭和大礼饗宴場の

〔図 17〕 二条離宮復旧工事 平面図

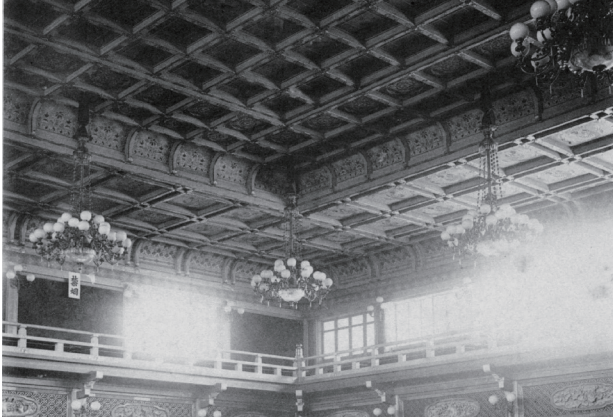


(宮内庁宮内公文書館所蔵)

〔図 18〕 大正大礼における建造物下賜の概要



〔図 19〕（左）京都市公会堂の外観（右）公会堂内部



(いずれも『公会堂及市庁舎新築写真帳』京都市所蔵)

遺構を御紹介します〔図 20〕。

昭和大礼の饗宴場は、京都御苑の中の、ちょうど現在の迎賓館の場所に建てられました。規模は大正大礼の饗宴場より大きいのですが、中央に舞楽場を備えて、周囲に饗宴場を設ける構成は基本的に変わりません。意匠も大正の饗宴場と同じように、明治宮殿の饗宴所である豊明殿を模したものでした。

大礼後、この饗宴場の一部は、大阪府吹田市の関西大学に下賜され、演武場に転用されて威徳館と命名されました。その後、威徳館は、演舞場の建替えに際して同じく吹田市内にある千里寺へ移築され本堂として現存しています。仏殿に転用されていますが、本堂の扉や窓等の建具、格間には黄色地に花模様が描かれた折り上げ格天井、35 灯のシャンデリアなど当時の鮮やかな内装の様子がよくわかります。本堂は国登録文化財に登録されています。

もうひとつ、河内長野の観心寺の恩賜講堂（平成 29 年 7 月に国の重要文化財に指定）も、昭和大礼饗宴場の一部が下賜され、剣道場に転用されたものです。恩賜講堂という大礼を記念する名称がつけられています。外観も内部も、饗宴場当時の面影がよく残されていて、特に内部は、二重折り上げ格天井や格間の文様や飾り金物が今も用いられています。

恩賜講堂の建築調査により、柱と柱の間、1 間＝12 尺というモジュール、奥行 13.5 間という寸法は、移築前の饗宴場時代のものが尊重されていることがわかりました。天井の格間には、千里寺と異なって青色が多用されており、舞楽場の廻りの饗宴場は、もしかすると、このようにそれぞれの天井の色が異なっていたのかもしれません。

もし機会があれば、これら昭和大礼の饗宴場の下賜遺構を訪れ、大正大礼の時に二条離宮に建っていた饗宴場に思いを馳せていただきたいと思います。

以上で、大正大礼の饗宴場の話を終わります。どうもありがとうございました。

（令和 3 年〔2021 年〕3 月 11 日）



原戸 喜代里／はらと きより●京都府生まれ。
民間の建築設計事務所勤務の後、京都府立大
学生命環境科学研究科博士課程修了。博士（学
術）。京都府立大学生命環境科学研究科特任助
教を経て、2014 年より京都市 文化財保護技師。

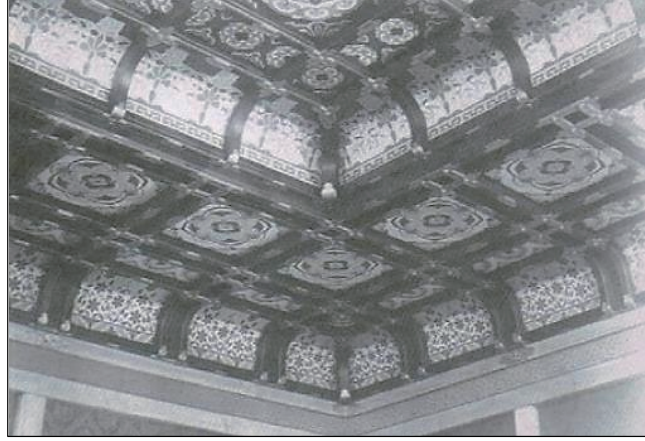
〔図 20〕 昭和大礼の建物の下賜

以下に挙げるのは昭和大礼の下賜の例であるが、「当時の威容を尊重し、形式を変えない」という下賜先での建築の主旨通り、当初の状態がよく残されている。当時のモノクロ写真だけでは饗宴場の色鮮やかな様子は知ることができないため、饗宴場の様子を窺い知ることのできる非常に貴重な遺構である。

饗宴場 外観



饗宴場 内部



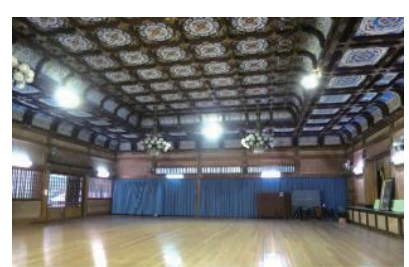
(国立国会図書館デジタルコレクション『昭和大礼京都府記録』)

関西大学威徳館（大阪府吹田市）



(関西大学所蔵)

観心寺恩賜講堂（大阪府河内長野市）



千里寺本堂（大阪府吹田市）（国登録文化財）



令和2年度

二条城歴史研修会〔記録〕

京都市文化市民局 元離宮二条城事務所

〒604-8301 京都市中京区二条通堀川西入二条城町 541

発行 令和3年3月

協力 (株) シー・ディー・アイ

〒604-8426 京都市中京区夷川通室町東入巴町 83 番地